



Title	<書評>James Laver, "Women's Dress in the Jazz Age" (1964)
Author(s)	村上, 憲司
Citation	デザイン理論. 1978, 17, p. 156-159
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53764
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

James Laver, “Women’s Dress in the Jazz Age”

(1964)

1918年11月、大戦は連合軍の勝利を以って終結した。終戦とともにいち早く、長い間禁止されていたダンスが復活し、クラブや酒場が活気をとりもどした。フォリー・ベルジェールやカジノ・ド・パリなどでは、ミスタンゲットやシュヴァリエ、ジョセフィン・ベーカーの唄と踊りが人気をさらった。カフェ・ラ・クポールやロートンでは、ジャン・コクトー、ピカソ、ヴァン・ドンゲン、ストラヴィン斯基、ディアギレフ、ルネ・クレールといった前衛芸術家たちが新芸術論をたたかわせていたし、服飾界では、神通力を失ったポール・ボワレに代って、ココ・シャネルやジャン・バトゥーといった一群が新人として登場してきた。一方では、ベル・エポックの楽天主義が崩壊して、人々の間には精神の統一性が見失われ、一切の伝統や形式を拒絶する若い世代が時代のリーダーとなった。アメリカは戦後ヨーロッパの経済を動かしてゆき、文化の面でもアメリカ化の風潮が目立ってヨーロッパに浸透していった。ジャン・バトゥーが、アメリカに旅行して、アメリカ女の気どりのない自然な態度に強い印象を受け、パリの店のために60人もの専属のモデルを、当時としては法外な俸給で雇ったのも、20年代が理想とする女性像が、ベル・エポックが理想とした女性像と全く相反するタイプのものであったことをうかがわせる。同様の傾向として、1925年、カジノ・ド・パリに登場した『Hoffman Girls』は、ヨーロッパに新鮮でスポーティな女のイメージを導入した。20年代を称して『ジャズ時代』と呼称するように、ジャズがヨーロッパに入り、デューク・エリントンやルイ・アームストロングが、若者たちを熱狂させた。シミイ(Shimmy)やチャ尔斯頓(Charleston)が大流行した。このようにアメリカの影響は、とりわけ若い世代の生活文化に敏感に反映してゆき、かれらは古い習慣やエチケットを拒否し、旧来の生活の信条に自信を失った父親は息子に、母親は娘に同化して、新しい生活のテンポに合わせて男女ともに若返った。

アメリカの女性は、1920年に選挙権を獲得したが、これは長い間、勇敢な女性たちによ

ってひきつがれて來た婦人解放運動にとって大きな勝利であった。戦後のアメリカは好景気を反映して生活の合理化を進め、家庭用電化製品の開発、缶詰食品の登場、アパート生活の普及、自動車の量産をとおして、女性の生活上の変革をもたらした。1919年以降、若い女性は経済的にも職業をもって自由を獲得する者が珍らしくなくなり、フランパー (flapper) と呼ばれる若い女性たちが、次の10年間の流行をリードした。そして1927年のいわゆるジャズ時代を代表するガルソンヌ・モード (*mode à la garçonne*) をうみ出した。

さて、ジェイムズ・レイヴァーの『ジャズ時代の婦人服飾』と題するこの挿画入り小冊子は、著者独特の軽妙なタッチと幅広い視野のもとで、1920年代のモードの世界を紹介してくれる恰好の書物である。また、この本の興味は、この時代のモードを「実用主義の」とか「機能主義の」といったおきまりの説法でとらえるのではなく、かれが掌中の婦人服の流行に関する核心の問題にふれながら、新しいモードの見所を開陳してみせてくれるところにある。そこで、やや立入ってそのへんのところを考察してみることにする。

かれはごく最近の著作 (*Modesty in Dress, 1969*) の中で、婦人服の流行の本性に言及して、「もし、ここで、性的な部位変移説 (*theory of the Shifting Erogenous Zone*) を正当に受け入れるならば、婦人服はまさしく *immodesty* の開発であることを認めなければならない」と述べ、この理論の由つて来るところを J・C・フリューゲルの『服飾の心理学』 (*The Psychology of Clothes, 1930*) からの要約をもってそれに代えている。すなわち、「服飾の起源が慎み深さ (*modesty*) にあったと今なお考える人でも、あらゆる種類の身体包被物が持つてゐる重要な重要性 (*sexual significance*) を認めている。女性の肉体の性的刺激性は、男性のに比べてずっと広く放散され得るものだ。また、女性の肉体は、被つておくのが習慣であるから、意識的にせよ無意識的にせよ、どの部分を露わにしても、性的な注意を集中させ、誘惑性を助成する。ファッショնは、まさしく、露出症 (*exhibitionism*) と慎み深さ (*modesty*) との妥協として成立するという14世紀の発見にはじまる。14世紀以後、今日まで、流行の目的は一連の女性の肉体のいろんな部位の露出あるいは強調であった。（中略）ところで、現代の男性は、露出された女性の肉体のかなりの部位を見るのに慣らされて來たので、かれらはそんなものを眺めても、以前ほど興奮しなくなったものだ。現代の若者は、女性の脚全体あるいは女性の腹部のかなりの部分をどぎまぎせずに眺めることができる。1920年代になって、服飾史上はじめて、女性の脚は人々の目に露わにされた。要するに、女性の肉体は、一連の興味を失った部位——それは今まさに火が消えようとしているファッショնによって人目にさらされた部位——と、今まさに登場しつつある、ファッショնにとっては関心の中心となる性的部位とから成り立つ

ている。そしてこの性的部位は常に変化していて、それを実際につかまえることは至難のわざであるが、それを追求することこそがファッションの務めである。しかしことわっておくが、あなたが現実にそれに追いついたとしたらあなたはみだらな露出の罪で逮捕されることは間違いない。もしあなたが、それにかなりのところまで追いつければ、あなたは「ファッション・リーダー」として選ばれた人物になる。いうなれば、登場しつつあるファッションは、常にきわめて大胆であり、退場しつつあるファッションは常にやばである。すなわちそれは、性的資本の貯えを使い果してしまった残り滓のようなものだからである」と。

いずれにせよ、このような流行の心的機構がどのように正確に服飾史的な事象の上に作用するかについての討議はともかくとして、James Laver の問題提起には一顧の価値があるように思われる。かれはこの小冊子のなかで、1920年代の服飾現象を *erotic-aesthetic-theory* という俎板の上で名人芸よろしく分析してみせてくれるのである。たとえ20年代の女性が口紅をさし（大戦前の貞淑な女性が唇に紅をさすことはタブーであった）、髪を短くカットし、ひどく無作法な態度で脚を組みタバコを吸い、悪びれずに短いスカートをはいたにせよ、彼女たちは正しく自分たちの欲しいものが何であるかをよく知っていたし、またそれを大胆に手れた。ショート・カット、シンプルな装い、ボイッシュな身のこなし——それらはすべて若い男性の注意を惹きつけるキーポイントであった。コレセツトされた胴、波うつペティコートで屈曲した容姿は、もはや男性の注意を惹かなくなり、モードの舞台から退場を余儀なくされた。女性の身体をしめつけていた一切の責具は取り去られて、見た目の豪奢さよりも洗練され高められた単純さがエレガンスの新しい特徴となつたのである。シャネルが提唱したモードの単純化は、決して服飾の民主化への皮相な擬態ではなく、新しい時代の女の生き方の表現そのものであったといえる。

おわりに簡単に著者を紹介しておくと、かれは1899年リヴァプール生まれ。1922年にヴィクトリア・アルバート博物館に入り、1938年から1959年まで、主にテキスタイル部門の主任として活躍した。1930年来、服飾史の研究、とくに流行史の分野に独自の見地を築き名声をあげた。参考のために主要著書をあげておきたい。

Taste and Fashion, (1945)

Letter to a girl on the future of clothes, (1946)

Dress, Changing shape of things series, (1950)

Early Tudor (1485~1558), (1951)

Costume in the Theatre, (1964)

Dandies, (1968)

Concise history of costume, (1969)

Modesty in Dress, (1969)

(京都女子大学 村上憲司)



舶来画材各種在庫

洋画材料・額様・製図器

フランス製 Pebeo 社

グワッシュ 各種入荷！

●ベルギー ブロックス油絵具総代理店



画 筋 堂

フランス製石膏像 京都市河原町五条上ル TEL341-3288